《修士論文要旨》

一乗院・大乗院間における衆徒・国民の調停機能

―大乗院寺社雑事記の分析を通じて―

溝田直己*

本稿は「一乗院・大乗院間における衆徒・国民の調停機能」と題して、『大乗院寺社雑事記』の分析を通して、戦国大名を内部から生み出すことができず、遅れた勢力として捉えられている衆徒・国民観について、地域的な統一権力や一揆体制のみを想定するのではなく、大和国独自の在り方が存在したことを十五世紀後半から十六世紀初頭までを網羅する大乗院寺社雑事記の分析を通して主張するものである。

一章では中世後期研究の動向を概観し、中世大和国研究の位置づけを図るため、最近の中世後期研究を牽引している「地域社会論」と「幕府守護体制論」に至る経緯を把握し、その概念を押さえた。そして大和国の衆徒・国民研究を中心に現状と課題を把握するために研究史の整理を行った。その上で、大和独自の地域社会を追究する上で衆徒・国民を地域社会のメンバーとして捉えることを提唱し、従来の衆徒・国民観を改めるために二章以下で分析した。

二章では吉田賢司氏があきらかにされた一乗院・大乗院間で起こった修理目代任料無沙汰の相論の分析を通して、官符衆徒で大乗院方衆徒でもある古市・豊田氏が両門跡間の仲介にあたり、門跡間の枠を越え、一乗院方国民の越智氏もそれを支援する状況を指摘した。

そして両門跡間の相論を収束させたものが越智・古市・豊田氏等の門跡間を越えた衆徒・国民の会合により、解決されたことに注目し、衆徒・国民が門跡間における調停者として機能していたと評価した。

三章では大乗院根本荘園、上総庄をめぐる一乗院との相論の分析を通して、二章と同様に衆徒・国民が門跡間における調停機能を果たしていたことを指摘した。

特に、興福寺の事務機関として位置づけられ、寺院社会での身分は下臈身分である衆徒により構成される官符衆徒中が興福寺の最高権力者に位置する大乗院の意思を制止していることに注目した。そしてそれを衆徒・国民の興福寺権力に対する限界論への反証であると指摘した。

四章では二・三章の分析を踏まえて、結論を述べた。

衆徒・国民は興福寺により編成された存在であり、戦国大名になれなかったのは興福寺権力に寄生した存在であったと考える限界論を改め、何故戦国大名という地域統一権力の形成・惣国一揆形成という方

平成17年度　*文学研究科文化財史料学専攻

向に衆徒・国民が向かわなかったのか、どのような可能性があったのかを大和の中世独自の問題として捉えることが重要であることを主張した。

主要参考文献

池上裕子・稲葉継陽「総説」『戦国社会』展望日本歴史一二　東京堂出版、二〇〇一年

川岡勉「室町幕府―守護体制の変質と地域権力」『日本史研究』四六四、二〇〇一年

幡鎌一弘「衆徒の記録から見た筒井氏」筒井順慶顕彰会講演会、二〇〇一年

鈴木良一『大乗院寺社雑事記　ある門閥僧侶の没落の記録』（日記・記録による日本歴史叢書　古代・中世編一八）そしえて、一九八三年

村田修三「城郭調査と戦国史研究」『日本史研究』二一一、一九八〇年

安国陽子「戦国期大和の権力と在地構造―興福寺荘園支配の崩壊過程―」『日本史研究』三四一、一九九一年

安田次郎「筒井氏の「牢籠」と在地支配」勝俣鎮夫編『寺院・検断・徳政』山川出版、二〇〇四年

吉田賢司「『大乗院寺社雑事記紙背文書』七一～七五号文書」ウラ大乗院の会五月例会レジュメ、二〇〇五年

歴史学研究会日本中世史部会運営委員会「小特集の趣旨」小特集日本中世の地域社会『歴史学研究』六七四、一九九五年

歴史学研究会日本中世史部会運営委員会ワーキンググループ「『地域社会論』の視座と方法」『歴史学研究』六七四、一九九五年

渡辺澄夫『増訂畿内庄園の基礎構造　上・下』吉川弘文館、一九六九・一九七〇年